

2021 (令和3年) 10/10 木曜日

毎日小学生新聞編集部  
郵便 〒100-8051 (住所不要)  
ファクス 03-3212-2591 電話03-3212-0321  
メール maishou@mainichi.co.jp

# 毎日小学生新聞

MAINICHI  
発行所 毎日新聞東京本社  
〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1


配達お問い合わせ  
購読申し込み  
0120-468-012  
(6-21時、一部地域は平日10-18時)  
定価 1か月1750円 (本体1620円、消費税130円) ・1部70円



▼宮城県安川町出身の神田瑞季さんが震災直後に描いた「生きる」—瑞季さん提供

東日本大震災 10周年 「あの日」に学ぶ

芸術・音楽



東日本大震災を知り、身近な防災を見つめ直す「『あの日』に学ぶ」の第11回は芸術・音楽、「希望を運ぶかたち・音」です。震災後の日々の中から生まれた絵や歌は被災者の心を温めるとともに、震災を語り伝える役割も果たしてきました。

【百武信幸】

## 未来を照らす絵



鈴木姫花さんが描き、ハンカチにもなった灯台の絵。父貴さん提供

### 犠牲の小4が道しるべ

福島県いわき市の鈴木姫花さんが描いた灯台の絵はいま、ハンカチとなって人々のもとにあります。家族でよく訪れた地元の塩屋崎灯台がモチーフ。小学4年生だった姫花さんは下校途中、おばあさんの家で津波にのまれました。

デザイナーになるのが夢だった娘の夢を形にしようと、お父さんの貴さん(45)は支援者の後押しで絵をハンカチに。この10年で1万人以上の手元に届けられ「姫花は亡くなった後も友達が増えて、絵のよ

うにニコニコ喜んでいるだろうな」と貴さん。「楽しそうな絵にひかれてハンカチを手にした人が、後で震災のことを知る。それが自分の命を守ることに繋がればいい。家族にとっても、ハンカチは生きる支えになっている」。姫花さんの夢は、描いた灯台のように未来を照らす道しるべとして生き続けています。

### 手をつないで立つ

がれきに向かって立つ5人の子もたち。この絵からどんなイメージを思い浮かべますか。これは、宮城

県女川町出身の神田瑞季さん(26)が中学生の時に描いた「生きる」という絵です。被災からまもなくして、先生から「支援に対する感謝の手紙に絵をつけてほしい」と頼まれ、集中して3時間ほどで描きました。

そのころ、瑞季さんが感じていたのは「がんばれ」という声への違和感。「つらい現実と向き合わざるをえない子がたくさんいて、私もふくめて手をつなぐことでやっと立ていられた」。瑞季さんは震災でおじいさんを亡くしました。5人の子の表情はあえて描かず、「本当は

逃げたい。でも歯を食いしばっているんだ」という胸の内も込めた絵は、絵はがきとなって多くの人に届けられました。

2016年には、おじいさんとの別れや震災の傷と向き合い、「なみだはあふれるままに」という絵本作家の内田麟太郎さんと作りました。「絵を描くことは私にとって祈り。色はその日一日を明るくしたり心を温かくしたりする力がある。自分が背中を押されたように、絵を通じて見る人の心に色を届けたい」と瑞季さん。2冊目の絵本づくりを進めています。

＝2面につづく

# 心こころ和なごませる歌うた



イラスト・にしむらかえ

巨大地震と津波が海辺のまちをおそった直後、あすも見えない不安の中にいた被災者の前に、柔らかな歌声がひびきわたりました。歌ったのは宮城県仙台市の八軒中学校の合唱部の生徒たち。間近に迫っ

ていた全国大会が震災で中止となり、そこで歌うはずだった「あすという日が」という曲を避難所になっていた校内で歌い、被災した人たちを温かく包みました。

音楽には、人の心を和ませ、元

## 東日本大震災後に生まれた歌

### ▽仙台市復興ソング・中学校バージョン

「仲間とともに」(1番を抜粋)

私にはなにができるだろう  
感謝の気持ちを忘れないこと  
復興を心から祈ること  
優しさと笑顔をみんなに届けること  
不安で前が見えなくなったあの日から  
私たちは歩き始めた  
未来という光を自指して  
前へ前へ仲間とともに 一歩一歩力強く

### ▽大船渡保育園歌「さかみちをのぼって」

(3番を抜粋)

さかみちをのぼって だきしめるあおぞら  
ふりむいてきくのは おわらないなみのうた  
なみだのぬくもりは たいようのほほえみ  
さかみちをのぼって だきしめるあおぞら



＝1面からつづく

気づける力があります。1995年に起きた阪神大震災の後にも、当時小学校の先生だった白井真さんが作詞・作曲した「しあわせ運べるように」という歌が被災者をはげまし、今も子どもたちによって歌い継がれています。

東北でも、仙台市内の子どもたちが「自分たちで歌を作ろう」と声を上げ、歌詞も募集して二つの復興ソングを2013年に誕生させました。小学生向けの「希望の道」と中学生向けの「仲間とともに」。市内全校にCDを配布するため合唱を録音した仙台青陵中等教育学校の先生の鳥自佳代子さん(59)は、この7年で歌われ方が変化してきたと感じています。「直後は、歌に感謝や『ともしがんばろう』との思いを込め、子どもたち自身が自分をはげます部分もあったが、いま歌うのは当時を知らない子どもたちなので、歌が震災を知るきっかけになっている」。授業で毎年歌うことによって、歌詞に込める気持ちがより強くなっていくのを感じるそうです。

### 避難をしみこませ

岩手県大船渡市の大船渡保育園には、震災後に生まれた園歌があります。「さかみちをのぼって」という歌で、支援に訪れた作曲家の千住明さんが作った曲に、詩人の寛和歌子さんが被災者の声から歌詞をつきました。

歌詞には、坂道の途中にある保

育園やまわりの風景が描かれています。直接的ではないけれど、地震が来たら高台へ避難することの大切さを伝えていて、まだ幼い子どもたちは、3番までそらで歌い上げるそうです。

理事長の富澤基子さん(77)は「今は意味がよく分からなくても、歌が体にしみこめば、大きくなった時、『この歌ってこういう意味だったんだ』と気づいてもらえる」と願いを込めます。この歌を基にした「坂道のうた」という合唱曲も作られ、県内の高校生らが歌い継いでいます。